■ 秋の公開講演会

環境の世紀を生きるために
—レイチェル・カーソンが遺したメッセージ—

2008年10月25日（土）
14:00～16:00
名古屋キャンパス D棟 DB1教室
上 達 恵 子 氏
(レイチェル・カーソン日本協会理事長)

【司会（津村）】：こんにちは。お時間が来ましたので公開講演会を始めさせていただきたいと思います。

南山大学人間関係研究センターのセンター長をしております津村と申します。よろしくお願いいたします。

人間関係研究センターでは、春と夏にこういったかたちで公開講演会をさせていただいております。今日は遠方より、レイチェル・カーソン日本協会理事長でエッセイストの上逹恵子さんにお越しいただきまして講演をお願いいたしました。

今、とても大切な課題が私たちの前に突き付けられていると思います。今日の講演会が、明日の、または今日の、私たちの生きる道の一つを選択する、そんな日になればいいなと思っております。

この講演会は地域の方々、それから学校心理士会、学校教育現場で子どもたちの教育に当たっていただいたいる先生方にも呼び掛けております。私たち地域の一人一人、それから、学校教育現場で子どもたち一人一人が、新しい命を大切にしながら育て合う環境ができることを願って、今日のこの公開講演会を開かせていただきたいと思います。

それでは、さっそく上逹先生のご紹介も兼ねまして、私どもの研究センターのセンター員であります、グラバア先生よりご紹介をしていたくと思います。よろしくお願いします。

【司会（グラバア）】：皆さん、こんにちは。本日は、レイチェル・カーソンのメッセージを上逹さんを通じて、皆さんといっしょにお聞きするということを私も大変楽しみにしております。

講師の上逹さんは、東京薬科大学をご卒業なさいました。「たぶんその頃ではないかなと思うのですが、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』の原書に、昆
虫学者でいらしたお父様を通じて、出会われたということでした。そしてご卒業後、東京大学農学部の農芸化学科研究室に勤務をなさっていらしたときの恩師から、レイチェル・カーソンの人となり、生き様を示した本を紹介されて以来、レイチェル・カーソンの研究をライフワークとされているということです。

『沈黙の春』。これは世界を変えた本の一つ、というふうに言われております。ちょっと『沈黙の春』が出版されて25周年に当たります1987年に、日本で初めてレイチェル・カーソン日本協会を設立しようという気運が盛り上がりました。そのときも設立にご尽力くださいまして、最初の代表委員のお一人をお勤めになりました。

以来、ずっとご研究を続けられ、先程ご紹介にありましたレイチェル・カーソン日本協会理事長というお仕事を、今もお続けになっているわけです。

それで実際に、レイチェル・カーソンは5冊の本を著作しておりますけれども、そのうちの3冊を翻訳させていただいています。それから長編記録映画として『センス・オブ・ワンダー』という作品も作られたのですか、その製作にも参加なさって、朗読者として出演なさいました。

『センス・オブ・ワンダー』ですが、この本は彼女が亡くなってから出版されたものですかが、詩的な本当に美しい文章で日本語で翻訳をされていて、レイチェル・カーソンのフィロソフィーと言えましょうか、彼女の心持ちというものが伝わってくる本ではないかなと思います。小さなお子さんが持ったお母さん方、それから自然の好きな方々にとってもいいのはということで、本日は入り口の所でご紹介させていただきます。ちょうどクリスマスも近いので、よろしかったらお求めください。

また、本日は大変貴重な映像もビデオで見せていただく予定になっておりますけれども、実は当センターの手違いでフィルムの最初の部分のところを操作ミスをしてしまい、少しお見苦しいかたで皆さんにお見せすることになりまして、まことに申し訳ありません。お詫び申し上げます。

いろいろな著作から見ますと、本当に物静かでとても優しい人柄に見えるレイチェル・カーソンという方が、当時この本『沈黙の春』を出せば政府・公共機関、そして製薬会社等から大変な圧力がかかるということを分かっていて、この本をお出しになったわけですね。ですから、そうした物静かな、親御さんを本当にかわいがったり、自然の小さなものを使いとおしあっている彼女の中に、どこからそうした力が湧き出てきたんだろうか。そういったルーツもたぶん今日お話の中で知ることができるのではと、大変楽しみにしております。上遠先生、どうぞよろしくお願いいたします。

【上遠】：皆さん、こんにちは。ご紹介いただいた上遠恵子です。

今日の題は、「レイチェル・カーソンの遺したメッセージ」というふうに書きましたが、レイチェル・カーソンを知っている方は、手を挙げてくださいますか。半分以上ですね。
15年くらい前にある短大で、ニュートンやダーウィンの、いろいろな人の名前を挙げて知っている人を聞いたことがありますがレイチェル・カーソンは、20人の中で最下位でした。それでもレイチェル・カーソンは、あまりよく知られてはいないかもしれませんが、環境問題を語るとき必ずその名前は挙げられます。

レイチェルは科学読み物作家としてすでに有名でしたが社会に大きなインパクトを与えたのが、1962年に出したこの『沈黙の春』（Silent Spring）という本です。これで私たちは初めて化学物質による環境汚染が、どんなに大変なものかということを初めて知らされました。

それまで環境汚染と語る時、放射能汚染が盛んにマスコミなどでも言われておりました。1950年代に大気中に水爆の実験が行われ、日本の漁船第五福竜丸が死の灰を浴び、久保山さんがという方が亡くなられました。どんな話がありましたが、東京の築地市場に入荷したマグロにガイガーカウンターをつけると、ガリガリガリガリという。つまりマグロは放射能を帯びて築地に水揚げされたのです。ですから私たちは、汚染ということと放射能のことを思い浮かべておりました。特に日本は広島・長崎の経験者ですから、放射能汚染には非常に関心がありましたが、化学物質による汚染についてはあまり知りませんでした。

したがって、その頃たくさん使われていたDDTやBHCのような殺虫剤が環境の中にいつまでも残るということについても危惧の念は抱きませんでした。殺虫剤DDT、BHCはすごく効くんです。効力が長くもつということはいつまでも分解していないということです。しかし「沈黙の春」によってそれらの物質は自然界の仕組みである食物連鎖で生物濃縮されて、食物連鎖の頂点にいる、猛禽類、人間、大型魚などの体の中に（化学物質が）蓄積されていって、それがやがて生命を攻撃することになるということを知ることとなりました。そこで私たちは、「えっ、そんなことあるの？」という感じになったわけです。

私は1929年生まれで、終戦の時が16才でしたから、空襲の怖さや戦争中戦後のものすごい空腹感、着る衣も無く、ちょうど今のテレビ出てくる難民と同じような姿であったということや戦争の悲惨さをしっかりと経験しています。ですから、その時代アメリカから入ってきたDDTやBHCが食糧増産に大きな力を発揮したことも見聞きしてきましたから、最初私は『沈黙の春』を読んだときに、やっぱりアメリカは、戦争に勝ったから、そして豊かだから、人間の食糧難を経験していないから、自然界の生き物が痛めつけられることについて問題視できるんだわ」と、非常に近視眼的な気持ちを持ちました。しかし、それが間違っていたということにすく気がつきました。

そのきっかけは1960年後半に、人間の母乳の中にもBHCやDDTが含まれていて、それをそのまま赤ちゃんが飲んでしまっていることが、厚生省の担当でおった女性の朝日新聞記者（先年お亡くなりになった松井勉依さん）によってスクープされた記事を読んだことでした。また、そのころ私は農学部にいたの
で、いろいろな研究会などで農薬が諸刃の剣であって、効くけれども害も与えるものだという事実を見聞きするようになるにしたがって、レイチャル・カーソンの『沈黙の春』をもう一度しっかり読み直してみようと思うようになりました。

レイチャル・カーソンは1907年生まれで、1964年に56才でガンで亡くなっているんですね。私が、レイチャル・カーソンに関心を持ったときにはすでに亡くなっていたから、現実のレイチャル・カーソンにはお会いしていません。しかし、私はレイチャル・カーソンに関心を持ち始め、この方にどんなはまり込んでいってしまいました。一度も面識が無く、ただ本を通してだけの備えでありでも、私の人生にこんなに大きな影響を与えたということ。私の人生のほとんど半分の40年近く、レイチャル・カーソンを研究してきたことを本当に不思議な出会いだと思っています。

それではまずレイチャル・カーソンがどんな顔をしていたか、どんな声をしていたかを書いていただきましょう。これは本当に貴重なフィルムです。テレビ朝日が20世紀の終わりに、「100人の20世紀」という特集を組んだ中の1つです。記者会見をしているところや、国会で証言しているところなど、レイチャル・カーソンの動いている姿が少し見られます。レイチャル・カーソンとその頃の大統領ジョン・F・ケネディとがどのように『沈黙の春』に対応したかが映っている映像です。まずそれを見ていただき、それからまた、お話します。

（ビデオ上映）

【上連】：今、皆様にご覧いただいたような生涯を彼女は送りました。

この映像を見ていて思い出しましたが、私も戦後、駅頭でDDTの粉を掛けられた記憶があります。今は自前で白い髪ですけれども、その頃は真っ黒な髪でしたから粉を掛けられるとまっ白になっちゃうんですよ。それが嫌で一生懸命逃げ回ったんです。掛けるほうは、おばあさんに掛けるよりも若い女性に掛けるほうが面白いらしくて、追いかけてくるんですよ。東京の渋谷駅で逃げ回った記憶があります。

考えてみれば恐ろしいことですね。私はその頃にたくさんの人、DDT、BHCを体に取り込んでいるので、私のたっぷり付いている脂肪組織の中にも、まだたくさん残っているかもしれませんが。

余談になってしまうが、『沈黙の春』に出ておりますけれども、あるニュージーランドの農夫が、あまりにも太っていたので少し瘦せようと思い減食をしていた。すると体の具合が悪くなってしまった。それは農業をやっている間にいっぱい取り込んで脂肪組織に蓄えられていた農薬の化学物質が、ダイエットすることによって一時的に血液の中に溶け出し、その結果肝臓を悪くしてしまった、ということを書いてあります。そして非常に長いこと具合が悪
かったと。この実例は化学物質が体の中に蓄積されるという事の警告であり、
ます。私に非常に都合良く解釈してダイエットはしないということにしています。
しかしかし、円満ではなく、私たちの体の中には500種類以上の化学物質が含
まれていると言われています。ですから、この問題は本当に大きな問題だと思います。
食べ物の中だって、今もう、化学物質フリーな食べ物など全くありませんものね。ですから子どもたちは、今、アトピーが増えていることや、生まれて
きたときに小さな奇形があることなど、現実の問題として私たちの身近に迫っ
て来ているわけです。彼女が警告したこととは本当に大事なことだったと思って
います。

「沈黙の春」が語りかけるもの

『沈黙の春』は、文庫本で新潮社から出ておりますから、ぜひ一度お読み
になっていただきたいと思います。そんなに読みたい本ではないんですが。
『センス・オブ・ワンダー』は、すごく読みやすくて短いし、30分もあればす
ぐに読めてしまうのですけれどね。
「沈黙の春」はかなり硬質で、堅い本ですので、中に化学式が出てくるもので
すから、みんな「難しいからとても読み切れないわ」と思って、その辺でやめ
てしまうんです。そこで私たちは、この本をゆっくりと全部最後まで、もちろん
日本語で、読みましょうと言う会を、毎月やっています。もう2年近くになり
ます。そうしますと、そんなことが分かってきます。現代の問題としてどん
なことが起きているだろうか、ということを話し合いながら読んでいくと、やっ
ぱりこの本は素晴らしい本で、一度は読むべき本だということを考えます。
この本は1962年に出て、もう45年くらい経っていますが、いまだに読んで
いるということは、彼女が警鐘をならした環境汚染がいまだに解決されずさら
に深刻化していることを証するとともに、この本がただ単に化学物質は「怖
いものだ」という事実を羅列しているだけでなく、地球上に棲むあらゆる
生き物の生命に対しどのような影響があるかということを、経済の言葉ではな
く生命的言葉で書いているから、読み続けられているのだと思います。
そして、このような現実ができてしまったことは、とりもなおしぼ人間の持っ
ている科学技術が、いかに両刃の剣であるかということ。私たちは科学技術が
発展することによって非常に便利で豊かな生活を手にすることができました。
暑さも寒さも飢えも知らないで暮らせるようになってきました。ですが、その
陰には必ず環境破壊や環境汚染というマイナスの面があるということを、便利
さに目を奪われているあまりに忘れていたのではないかと思うのです。また、
私たち先進国と言われる世界の20％程の国の人たちは、豊かさと便利さを手に
することができたわけですが、発展途上国にいる人たちは、そうした便利さ・
豊かさから取り残されて貧困の中に今もいるということは、決して忘れてはい
けないと思っております。
彼女が『沈黙の春』を書き始めたきっかけは、先程のビデオにもありましたように、友達からの一通の手紙でした。しかし、もっと前から彼女は、1950年代の冷戦時代、核兵器や、原子弹科学の開発によって人間が強大な力を持ってしまったことに対する強い危惧の気持ちを、根底に抱いていました。その頃、彼女はこんなことを言っています。
彼女の言葉を借りれば、「自然界の多くは永久に人間の手に届かないところにあると信じることは楽しいことでした。人間は森を切り開き、流れを堀き止めることが出来ても、雲、風、雨、風、雲は神のものです。生命の流れは、すべてが神の指し示したいずれかの進路を……その流れの一矢ずつでである人間に妨げられることなく——永遠に流れ続けると思っていました。しかし、その一滴の人間が、原子弹、核という大きな力を持ち、生命の流れの方向を変える力まで持っていました。そのことについて自分は、とても疑問を抱いた」と。
このままでいいのだろうかと思うか日、すでに科学読み物作家として名を成していきましたけれども、一時はもう筆を折ろうかと思った程、深刻に考えていました。
そして、空から農薬、殺虫剤を散布する様子が、放射能を含んだ死の灰が降り注ぐのと同じように思えたのです。この2つはともに、かけがえのない生命に攻撃を仕掛けているのですから。
彼女はどうしてもこの本を書かなければならないと決心するのです。初めは有名な作家のE. B. ホワイトや、その他のジャーナリストに書いてもらおうと頼みますが、この難しい問題に取り組むことは科学的知識も必要だし、先程のビデオにあたるために、企業からの反対運動もあろうし、激しい論争も起こるだろうことも容易に想像できました。E. B. ホワイトはこの問題に大きな関心をもっていましたが、執筆をひき受けはくれません。そして「あなたが書きなさい。レイチェル、あなたこそ書ける人だ」と励ましたわけです。
遂にレイチェルは『沈黙の春』を書くことになりました。『沈黙の春』の中にE. B. ホワイトの言葉も引用されています。
「私は人類に対して大した希望を寄せていない。人間は賢過ぎるあまりかえって自ら災いを招く。自然を相手にするときには、自然をねじ伏せて自分の言いなりにしようとする。私たち、みんなの住んでいるこの惑星にももう少し愛情を持ち、暴君の心を捨て去れば人類も生きながらえる希望があるのに。」
1958年頃から執筆を始めて4年後の1962年に本は出版されました。賛否両論の激しい論争が起こりました。個人的な誇誇もありました。これまでも空中散布によって池の魚が死んできました、鳥が死んだ、牧場の馬は水飲み場の水を飲んで具合が悪くなった、幼稚園で遊ぶ子どもたち頭の上に農薬がふりかけられているなど、いろいろな苦情が市民から寄せられてきましたから一般市民はこの本をおおいに支持しました。しかし、農薬業界からは凄まじい反論が
あったわけです。

先程のビデオに出た農薬工業界の人には、私も1998年に会いましたけれども、
「その顔は自分たちが正しいと思っていた」なって言っていましたけど、今だっ
てそう思っているんですよね。対応がソフトになっているだけで、やはり少しも
本心は変わっていないなと思いました。

彼女は反論に対して特に一つ一つに反論はしないんです。それはなぜかとい
うと、この本を書く前にすでに数百編の学術論文を読みこなしきそに基づいて
書いていますので科学的に正確な証拠があるという確信があったからなのです。

科学者の道を選んだレイチェル

子どもの時から作文が得意だったレイチェルは作家志望でした。ペンシルベ
ニア女子大学では、最初は文学専攻でした。二年生になって生物学の授業を受
けたときに、自分が幼いときから慣れ親しんでいた自然界の不思議を解くカギ
が生物学の中に秘められているに気づき、専攻を理科に変えるのです。文学部
の先生には「科学を勉強しても、女性はなかなか仕事に就けないのよ。中学の
先生がそこそこよ」というような調子で、一生懸命文学部に残るように説得さ
れるのですけれども、結局、生物学を専攻するに決まります。そしてポルチモアに
あるジョンズ・ホプキンス大学大学院で「ナマズの発生段階における形態学的
研究」で修士号を得ています。そうした積み重ねが科学と文学が合流した彼女
の作品の特徴を生み出したのだと思います。科学論文を読みこなす基礎知識が
あったのですから、数百編の科学論文を読み、証拠がはっきりしているものを
下に『沈黙の春』を書いたから、自信があるわけですね。仮定・推量や、想像
で書いていない。そうした正確さは、市民運動でも、個人の日常生活でもて
も大事なことだと思います。

また、どんな誇張に対してもたじろぐことのない信念を持っていたものは、
彼女自身の心の中に豊かに育まれていた自然に対する愛、生命に対する深い畏
敬の念、つまり「センス オブ ワンダー」 自然界的不思議さ、美しさ、神
秘さに目をみはる感性でありました。理論だけでねじ伏せていくということは
できても、読者の心に響かなければ説得力はありません。やはり彼女の作品は、
海の三部作もそうですが、非常に詩情豊かです。それは彼女自身の感性が、自
然界の様々な現象の美しさ、不思議さを全部感じ取る感性があったからこそ成
し得たものだと思います。『沈黙の春』も彼女の感性があったからこそその使
命感を支え、大きな反響をもたらしたのだと思っています。

『センス オブ ワンダー』の起源

ここに『センス・オブ・ワンダー』という、小さな本があります。もうお読
みになった方もおられると思います。先程のビデオのなかにひげ面のおじさんが
出てきましたが彼はロジャーという彼女の養子で彼女の姪の息子なのです。
ロジャーはまだ小さい赤ん坊の頃から、レイチェルの持っていたサマーハウスで夏の間過ごしております。その別荘は米国の大西洋岸、カナダに接したメイン州の森の中にあり、小さな木造平屋建てで今でも残っております。ビデオの最後のシーンのところで海が出ていましたね。そして、ひげ面のロジャーが最後に、「子どもを育てるにはセンス・オブ・ワンダーが大切だ」と言っていた、あの海岸は、レイチェルの別荘の庭先をトトコと降りていった所にある岩だらけの海岸です。レイチェルはそういった所で夜となく、昼となく、小さなロジャーと自然界を探究して歩いています。その経験を基に、「センス・オブ・ワンダー」を書いたのでした。

この本は、1956年にアメリカの婦人誌『ウーマンズ・ホーム・コンベンイオン』に、「子どもたちに驚きの目を育ませよう」というタイトルで短いエッセイを書いたことが基になっています。そのなかに子どもたちに自然体験をさせよう、そこで咲く豊かな感性がこれから的人生で大切だ、ということを書いています。お読みになった方はご存じだと思いますが、本当に、「そうだ、そうだ」と共感を抱くような文章が書かれています。私がこの本の中で、ここがキーワードだと思うところがあるので、少し読みたいと思います。

「子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激に満ちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になる前に澄みきった洞察力や、美しいものの、畏敬すべきものの直感力をぷららせ、あるときはまったく失ってしまいます」

「もしも私が、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに生涯消えることのない“センス・オブ・ワンダー”を授けてほしいと願むでしょう」しかし「妖精の力にはたらないので、生まれつきそなわっている子どものセンス・オブ・ワンダーをいつも新鮮にたもつつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のあらゆる、感性、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があります。」

本当にそうですね。そばにいてくれる大人とは、まず両親です。おじいちゃん、おばあちゃん、幼稚園、保育園、学校の先生。みんな子どもと感性をいっしょに、子どもが「奇麗だね」と言ってから、「本当奇麗だね」と言って子どもの感動を共有する大人がいることで、子どもにどんどん豊かな感性が育っていきます。

小さな子どもはお父さんやお母さんが大好きですから、幼稚園や保育園の帰りにみつけた小さな石ころや花、葉っぱを拾ってよくお土産を持ってきてくれますよね。そしてお母さんに、「はい」とて渡します。そういうときに「ああ、奇麗ね」「これ不思議だね。赤い色が入っているね」「これ、どこに咲いていたの、いっしょに連れてきて」などと言って子どもの気持ちに寄り添うと、子どもは、すごくハッピーになります。
けれども、ちょっと忙しかったり疲れてしまったりする。何、そんな汚い石を持って来て」とか、「そんなところへ置かないで」とか言ってしまいます。それから、一番低いのは無視してしまうことですね。まったく無視する。そうすると、子どもはショッボンとします。私たちは子どもの気持ちを、すんななりとそのまま受け取る大人になりたいくこの本を読んで心から思います。

また、環境教育の現場にいる人たちが盛んに引用するところがあります。「わたしは子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭を悩ませている親にとっても、『知る』ことや『感じる』ことの半分も重要ではないと固く信じています。

子どもたちが出会う事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情熱やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代はこの土壌を耕すときです。」

私はここを読んだとき、とくに後半の部分におおいに共感しました。子ども時代は、心の土を耕すときなのですと言うことに。今、子どもたちの中にも子供がすごく多いんです。本当にその者の私たちは大切なアナログ人間には分からないようなことを、いっぱい知っています。小さい子が、パソコン用語を駆使している場面に遭遇すると考え本当に後期高齢者は辛いです。

それはとにかく、もの知りの博士でもいいけど、案外本物を知らないことが多いのです。ドングリが帽子を被っていることは知っていても、そのドングリが落ちている森に行ったことがなかったり、森の中を流っている風の音を知らなかったり、風の冷たいせいを知らないったり、いろいろ本物を知らないということがあります。私は幼い子ども時代は、そういう本物の自然に触れさせることが、大事だと思うのです。

レイチェル・カーソンの幼年時代

話をレイチェルに戻すと、レイチェルはペンシルベニア州の内陸部にある、昔、U. S. スチール社があった鉄鋼都市ピッツバーグから、30キロほど離れたスプリングデールという田園地帯で育ちました。そこには今も生家が残っております。現在は郊外の普通の住宅地になっています。1907年生まれのレイチェルが育った頃はその辺は一面草原で、森がひろがり、丘のふもとにはアレグニー川というきれいな川が流れていた田園地帯でした。レイチェルには、お姉さんとお兄さんがいますが、年が離れていたので、小さいレイチェルはお母さんといっしょに森や野原を歩き回ることが多かったのです。

レイチェルのお母さんは牧師の娘で、その当時、1800年代生まれの女性としてはしっかりとした教育を受け、学校の先生の資格を持っていました。1930年代のアメリカでも、結婚すると教師を辞めなければならないったんだそうですね。ですから、お母さんは1894年に結婚を機に学校の先生を辞めたのです。知的好奇心も旺盛で社会参加もしたいのに家庭に押し込められちゃったのです。
そういうふつふつたる思いを持っているお母さんでした。

その頃（1900年代の初期）、アメリカには自然学習運動というのがありましたが。自然界に出て、いろいろな自然界の動物や植物などの生態を勉強しようとという運動でした。それは分かご神学的な意味もあって、神が創造したものいかに素晴らしいかということを知る、という面もあったようです。小学校の子どもでは、「自然学習の手引き」というようなパンフレットを家庭にもちかえって親に見せました。この運動は、レイチェルのお母さんにとって、知的好奇心を満足させるまたない機会になりました。

そこでお母さんは小さなレイチェルを連れて、森や野原を歩きまわりました。そして自然界の仕組み、今でいうエコシステムが、互いにかかわり合いながら自己たちの生命を支え、子どもを育て繁殖し、そしていつかは死んでいくということ。そして小さな虫は鳥に食べられ、小さな鳥はまた大きい鳥に食べられ、水の中にいる小さなプランクトンは小魚に食べられ、小魚は中魚に食べられるといういろいろな循環があることを、レイチェルに体験的に教えていきました。

そうした体験があるから、自分の大切な友達である自然界の生き物たちが、化学物質によって、農薬によって、いためつけられ絶滅に追い返されていくことに大きな疑問を抱いたのです。そして農薬を作った人間は、人間の都合のためだけで虫を害虫と益虫に分けて、これは害虫だから抹殺してしまうのだという殺虫剤をきき散らします。しかし、害虫を殺すためにいた薬でも、益虫という名前を付たものまでもが死んでしまうことに対して、本当に心底怒りに似た危惧の念を抱きました。それが『沈黙の春』を書かせる動機になっていたのです。

今これを書かなければ、自分は二度と再び森で美しい鳥の声を聞くことはできないだろうという、強い思いがあったのですね。彼女の作品の中で、『沈黙の春』と『センス・オブ・ワンダー』とは、まさに車の両輪のように彼女の思想と思いを表していると思っています。

「センス・オブ・ワンダー」の翻訳に関わって

『センス・オブ・ワンダー』は、今は新潮社から出ていますけれども、最初は1991年、佑学社という子ども向けの出版社から出版されました。そのとき、編集者の人と本のタイトルをどうしようかと相談しました。『センス・オブ・ワンダー』は、難しい英語ではないのですが、日本語にするといい訳がないのです。一言でポンと言えるような、訳を考えられないのです。ある先生が、これには“感応力”というようなものだと思っちゃいました。感じるの感に、応用問題の応に力ね。しかし、この本はもし“感応力”という本だったらどうでしょうか。ちょっと“感応力”ではアピールしないのではないかと話しをして、『片仮名で、『センス・オブ・ワンダー』でもいいんじゃないか。』『じゃあ、そうしよう』ということで、『センス・オブ・ワンダー』というタイトルになっ
たのでした。
本当にこの本は、日本人のフィーリングにあったのでしょうね。年齢を問わず多くの方が読んでくださって、佑学社から新潮社に引き継がれて、版を重ねて読まれています。
ひとっ早い話をいたしましょう。『センス・オブ・ワンダー』が初めて佑学社から出たとき、私も自分の本が本屋に並ぶのが嬉しくて、紀伊国屋に行きまして、「『センス・オブ・ワンダー』という本はありませんか」と聞いてみました。すると若い店員さんが「えっと、『戦争って何だ』って本ですか」と広げて見返したのです。声を出して読むと「センス・オブ・ワンダー」と「戦争って何だ」と似てますよね。私は『戦争って何だ』って本じゃないくて『センス・オブ・ワンダー』という本なんですよけれど、と内心ひやひやしながら言いました。「あっ、それならあそこに」指さしてくれました。平積みになっていた本を見て安心したことがあります。その店員さんはいみじく、「戦争って何だ」と言いましたけれども、センス・オブ・ワンダーという感性は、目の前の自然界に対して、美しいなあ、綺麗ね、不思議ね、可愛いんですねという、柔らかなものだけではないと思います。自然界のしくみに対しても、人間社会の矛盾や不条理、戦争と平和について、また人間と自然ののかかわりについてはあらゆるものに対して、アンテナを張り巡らして真実をみつめ理解していく力であると思います。

自然とのふれあい
最近の国際情勢をみると、私もそんなに詳しくありませんけれども、世界中、この日本の社会にも、何とも言えない閉塞感と不安感が漂い、人間の心が荒廃していますよね。子どもが親を殺し、親が子どもを殺し、自分が誰にも認められないのであるって人を殺してしまうというような、あまりにも悲しい不幸なことがあり過ぎます。こんなときこそ自然に触れることができることが求めるのです。自然を仲立ちにすることで人間間のコミュニケーションも取れるようになるのです。
親子が毎日幼稚園や保育園に行くときに、「○○さんのお家の梅の木を毎日見よう」とか、「あそこ玄関の隅ってこの三角形、ここだけはいつも見よう」と決めておきます。そこにタンポポが咲いたり、「○○さんのお家の梅の木は花が咲いたよ」「青い実になったよ」、そのうち「熟れて来たよ」とすれ、小さな自然を仲介にして親子の間でいろいろな話題がふえてきます。これは小さな身近なことですけれども、大きな自然の中に行ったときでも、そういうことが起こります。
19年前の話ですが、南山短期大学が清里で一週間の合宿ワークショップを行いました。グラバ先生のご依頼で私は「センス・オブ・ワンダー」というタイトルのワークショップを担当しました。私の生涯で最初にやったワークショップ
プロです。ワークショップで、参加の学生さんは十数人でした。その他にもいくつかのワークショップがありましたが私たちは同じメンバーで『センス・オブ・ワンダー』について読んだり語ったり、森を歩きまわったりしました。私は最初のワークショップだったので、緊張しコホコホになっていました。講義と違ってワークショップのやり方が分からない。学生さんたちにも、「先生、固くなってるね」と言われるくらいだったのです。

でも2日目から外に出ました。森のなかを歩きながら晚秋の自然を体感しました。持ってきた虫メガネで、いろんな小さいものも観察してもらいました。木の木の模様、葉脈、落ち葉の下に隠れている小さな虫、若などを驚きの声をあげながら観察しました。ホコリタケという丸っこい、ボビンとしたキノコが土の上に転がっていて、ポンポンと指をはじくとてっぺんの小さい穴からフーッと胞子を飛ばす様子を生まれて初めて見た人もいてみな息を殺して見つめたのです。秋も深まったのでモミジや、黄色い白樺の葉っぱがさらさらと散り、強い風で白樺の皮が剥がれて飛んでいく様子を見たりしているうちに、今までコホコホで、なかなかしっかり話し合いができなかったのが、2時間くらい歩いて帰ってくる間に、みんなすっかり仲良くなって自然にいろいろな話をしました。「あそこでみんな気が付かなかったけど、白い羽毛のような種が飛んでたよ」とか、「林の土がふかふかしていた」とか、「森の匂いが良かった」などのいろいろな言葉が出てくるようになりました。それからはワークショップはうまくいきました。最後の発表会のときには白い紙に木の枝や葉を貼りつけた背景の森の物語を作り、私は年老いた森の精になって、冬になったので眠りにつくという役をやりました。森の小動物や小鸟になった人もいるし、とても楽しいワークショップでした。

その中の一人の方とは、今でもお付き合いがあります。そういう深い経験をしました。そのように、何と大自然に行かなくても、中自然でも小自然でも植木一つでも、その自然と触れあうと世界がひろがるのを感じることはいいことだと思います。そして、一度そのものに愛着を持つようになれば、またそのことについてもっとよく知りたいと思うようになると、レイチェルもこう言っています。

“美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知のものに触れたときの感激、思いやり、懐かし、感嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたび呼び覚まされると、次はその対象となるものについてもっと知りたいと思うようになります。そのようにして見つけ出した知識はしっかりと身に付きます。”

子どもの世界の無限の可能性

小さな子どものこんな話があります。3歳くらいの男の子が庭で遊んでいたら、何かが頭にコツンと当たった。それはヤママフジというフジの種子でした。豆科の植物は、実が熟すると殻が捻じれて弾けて種子を飛ばします。この
教室の上の段くらいまで飛ぶものもあります。その子はたまたま郊外の植物が多いところに住んでいたのでその種子に出会えたのです。自分の頭に当たったものが種子だったので、その男の子は種子に対しての好奇心がむくむくと起きたのでしょうか。子どもは小さくて地面に近いから、いろんなものを拾ってきます。その子も大人が見過ごしてしまうような種子などを、いっぱい拾ってきて宝物にしていた。母親は仕事を持っていたので、なかなかいったしお散歩も出来なかったので、『たぬの旅立ち』という大人向けの写真集を買ってきて与えました。大喜びで本をめくっていたその子は、自分の知っている種子がその写真に出てくるのを下に書いてある説明の字が読めない。でもなんとかして読みたい。お母さんは昼間いないから、教えてもらえない。そこで一計を案じて、お隣の小学２年生のお兄ちゃんに字を教えてもらうと思って、本を抱えてチョコチョコとお隣のお兄ちゃんのところへ行きました。そこに小さな幼い師弟関係ができまして、その男の子はついに平仮名を読むことができるようになりました。そして、自分が読みたいその種子の名前がガガイモという植物の種子であったことが分かりました。その子にとってみれば、知りたい一心で字を読めるようになったことが嬉しくて大得意でした。自分の思いを遂げたという満足感、達成感は自然界をはじめもっともろの事柄に関心を持つようになっていく原動力になります。

またある男の子は、小学校の３～４年生になって、ゲームに夢中になりまし た。毎日毎日ビビビキャラにイエス、あがる音で、子供たちと基地作りとかをやりはじめました。そうすると、小さいときからあまり外遊びをしていない子どもは、もたもたしていてなかなかうまくいかない。その点小さいときに外遊びをしていた子どもは、ちょっとの痛みはなんのその、かなりワイドにやっていま す。でもそこが子どもの素晴らしいところで、いくらもたもたしている子どもでも、最 終的には下手であれぐずくずであれ、自分の基地をつくりあげます。

それを見ていると、やはり小さなときに自然体験をしている子どもほうがずっと手際はいいし、危機管理能力もあるのですね。いろいろな自然体験を子ども時代にさせておくのは、たくさんを育て、自然界にある生命に対する感性を培うことになるといいと思います。

大抵の子どもは虫が大好きで飼ったりします。ダンゴ虫なんて大好きですよ ね。まずダンゴ虫に興味を示さない子どもはいないと思うのですが、みんなに 不思議なものはないですね。触れればコロコロになって転がるし、放っておけば、またニュニュって戻ってくるし、あんなに面白いものはない。あっしぐれ子どもの が最初に出会う生命の秘密、不思議じゃないかと思います。そういうことをた くさん経験した子どもは、あるときは自分の不注意で飼っていた虫を死なせて しまうかもしれません。そうすると、悲しみになって泣いてしまいます。子どもは、かわいがっていたのに自分で殺ってしまった。どんなにナゼナゼしても起き上
がらない虫がいるということから、死というものも知るわけです。そして、生命が大事ということを分かってくると思うのです。そして、自分がまわりにいるたくさんの生命、友だち、犬や猫、ダンゴ虫、バッタ、ナメクジなど。それらの生命に囲まれていることが分かったときに、お父さんでありお母さんでありお友達というのを大事にと思うという気持ちが芽生えるのだと、私は確信しています。

ですから親たちも一生懸命子どもに寄り添って、子どもといっしょに生命の輝きに感動を共にしてあげると、子どもも、いろいろな生命を愛するようになる。人間は自分の好きなものをいじめることは、まずしないと思います。母親は自分の子どもに害を加えるものには体ごとぶっかかっています。そういう怒り、愛するものを守るときの怒りというのは、私は非常に大事な怒りだと思いました。

ですから、穏やかに、丸くということは人間社会の中では大事なことだけでも、あるときには本気で怒ることも必要だと思っています。レイチェルが「沈黙の春」を書いたのも、自分が愛している自然界の生き物たちが、化学物質によって殺されていくことへの怒りでした。

平和でなければ環境は守れない

というのは、細かい身近な人間関係の中だけのことではないからです。私は先程も言いましたが、戦争体験者です。食べ物のない腹へ、空爆の怖さも、機銃掃射の音も、目の前に焼夷弾が落ちてくる音も、今でもあのシュルシュルシュルという音は忘れられません。B29という爆撃機が飛んでくるゴオンゴオンという音も忘れられないですね。

そうした経験から、今は世界規模の大戦争はないけれども、あちらこちらで起きている戦争、もしかしたら戦争に巻き込まれて死ぬかもしれないという状況に対して、また、知らないうちに戦争が起きるかもしれないという現実に対しては、やっぱり私は声を大きくして怒らなければいけないと思います。平和は絶対に守らなければならないなと切実に思います。

私は戦争は、環境破壊の最大なものだと思っています。物理的に環境を壊すばかりだけではなくて、人間の心を荒廃させます。今、そうした紛争地域にいる子どもたちが、将来どんな大人になるのか、その心のケアはとても大切なことだと思っています。私が若ければそうした子どもの教育に参加したいと思うこともしばしばです。

自然のリズム

我々の日常生活はかなり発信モードです。「分かってちょうだい」「私はこう思うのよ」「こうしなさい、ああしなさい」という発信モードです。時々そのモードを変えて、受信モードにする事はとても必要ですね。
私は『センス・オブ・ワンダー』の映画を撮りに、アメリカのメイン州にロケーションで6回以上参りました。そのときにいかに受信モードになることが大事かということを感じました。待つということでしょうか。

森に映像を撮影っても、いい光になるまで待ちましょうと言われれば、ただひたすら待つわけですね。引き潮から満潮まで待ちましょうと言われれば、とにかくその時間を待たなければならない。そこでは人間の力でどんなに逆立ちしても、その時間を早くすることはできない。そこには自然界のリズムがあるということ、人間以外の、人間の時計以外のリズムがあるということを知りました。

それはうまく表現できないけれども、私にとって深い経験でした。近代人はせっかりすぐ答えを出したがりますが、ある一定時間は待たなければならいうことを知らなければならない。今、この時代だからこそそれが必要だと思うます。たとえば、環境問題にどうやってコミットするか、どうやって参加していくか、いろんな答えがありますが、これじゃないければならないというものはないと思っています。ゴミの分別、リサイクルに協力する、水の浄化、子どもの自然体験、木を植えるなど、いろいろなことがありますが、その一番のキーワードは、自然界のリズムを壊さないようにすること、生命を大切にすることです。人間以外の生き物がいるのだということです。この地球上は生命の糸で繋げられたネットで覆われています。人間もその網目の一つに過ぎないことを肝に銘じることです。

先程のビデオのなかで、ダイアン・ダマノスキーが言っていたが、地球は人間だけのものだという傲慢な気持ちを捨て、謙虚な気持ちで自然に向かい合うことを、一番根っこと持つことが大切だと思います。

それから、自分のクリエーションの“創造力”、イマジネーションの“想像力”を働かせて、自分がいかにこの環境の世紀を生きるかという生き方を見つけていかなければならない、と思っています。自然の中に入って子どもたちと遊んでいると、子どもたちの創造力と想像力の無限のひろがりに感動します。子どもだけにそんな楽しいことをやらせておくことはないの、私たち大人も必ずしも森の中に行かなくても想像力と創造力をきちんと開発していきたいものです。自然のリズムを感じながらの生き方はゆっくりとしています。能率一辺倒、すぐに結果が分からないと評価されない昨今の風潮とは違うかもしれません。しかし、私たちはいまこそ立ち止まって、持続可能な世界を作るためのライフスタイルを見いださなければならないと思います。

「別の道」を歩く

レイチェル・カーソンは『沈黙の春』の最終章“別の道”という章でこう言っています。

「私たちは今や分かれ道にいる。だが、ロバート・フロストの有名な詩とは
違って、どちらの道を選ぶべきか今さら迷うまでもない。長い間旅をしてきた道はすばらしい高速道路ですごいスピードに酔うこともできるが、私たちは騙されているのだ。その行き先は災いであり破滅だ。もう一つの道はあまり人間行かないと、この分かれ道を行くときにこそ、私たちの住んでいるこの地球の安全を守れる最後の唯一のチャンスがあるといえよう。とにかくどちらの道を取るか決めなければならないのは私たちなのだ。」

私たちは「別の道」を歩く勇気を持たなければならないうと思います。また、どんな別の道があるのかを考えていく、それがこれからの生き方だと私は思うのです。

今、「グローバリズム」というのでしょうか、この道が一番成功する、この道がいいのだと、みんなそちらへ行ってもらって、その結果がどうでしょうか。すべての玉子を一つの籠に入れたようなもので籠が落ちたら、あっという間に最近の混乱した経済状態になってしまいました。しかも、いくつもの籠に分けてあったら、こんな玉子もあり、あんな玉子もあったら、こんなに一度に割れていて、世界同時的にあっという間に貧乏になってしまったと大騒ぎするような事態は避けられたのではないでしょうか。もっと別のいろいろな生き方があってよかったのではないかと思うのです。勝ち組はどんどん金持ちになったかもしれないけれども、そのかげで落ちこぼれた人たちもたくさんいる。その人たちは本当に希望も夢もない生活に喘いでいる。そういうことはおかしいです。みんな、それぞれが幸福でなければならないと思います。

源信という天台宗の僧侶が985年に書いた往生要集のなかの言葉です。千年間のことばに今に生きる力を感じます。

「足るを知らば貧と言えど富と名づくべし。貧ありとも欲多ければこれを貧と名づくべし。財があっても欲が多かったらその心は貧しいです。やはり私たちは足るを知らなければならないかもしれません。それがこの乱世を生き抜く力にもなるだろうと思います。」

遺伝子に刷り込まれた緑の記憶

6000万年前から7000万年前に小さな哺乳類の先祖と言われているものが森に生まれてから人類の祖先たちは、ずっと森に住んでいました。50万年前にやっと草原に出てきて二足歩行をするようになり手が使えるようになって頭がよくなり、今日のホモサビエンスに進化してきました。私たちは遺伝子の中には森に住んでいた「緑の記憶」というのがあります。緑を見ると心が休み、森に行くといい気持ちになる、それは私たちの遺伝子の中にある緑の記憶が呼び覚まされているのです。

ですから、レイチェルが大事なのは遺伝子であると言っているように、そうした生き物としての感情、私たちの中にある緑の記憶、森に住んでいた生き物であったときの記憶を蘇らせて、五感を鋭くして、アンテナを張り巡らし、
そして多様な生き方をしていきたいと思います。

また、先程言ったように、センス・オブ・ワンダーというのは、いろいろなものに向ける感性でありたいと思っております。そうした感性を持つことで生き残れるし、幸せに生きられると思うのです。生き残っていっても、いつも不満をかかえ私は不幸だ、貧乏だと言って陰陰消滅して生きるのではなくて、たとえ貧乏であっても、生きているのはすばらしい、こんなに面白いという、生き生きした明るさを持って生きられるようなところまで、私たちの遺伝子を蘇らせて、今の風潮に慣れないでいきたいと思っています。

明るい希望を持って

そして最後に、今ノーベル賞を日本人が4人も受賞いろいろな方が話題になっていますけれども、そのすばらしい頭脳を持っている人たちの一番の元は、やっぱりセンス・オブ・ワンダーだと思います。

朝永振一郎さんというノーベル物理学賞をもらった方の言葉にこんなのがあります。

「不思議だなと思うこと、これが科学の芽です。よく観察して確かめる。そして考える。これが科学の茎です。そして、最後に謎が解ける。これが科学の花です」。

こんな素敵な言葉を語っておられます。豊かな感性があって、不思議だな、なんでだろう。だから勉強する、科学する、学問をすることは、まさにセンス・オブ・ワンダーです。また、やはりノーベル賞をもらった田中さんも、小学校のときの理科実験で何か分からないけれどもむくむく膨れ上がるものを見て「不思議だ、面白い。僕はこれを勉強したい」と思ったきっかけだと言うことです。不思議だなと思うこと、センス・オブ・ワンダーの気持ちを、私たちはいろいろなところで持ち続けば、この世の中もうちょっと楽しくなるじゃないでしょうか。

このごろみんなの隠し顔をしていますよね。今日も新幹線の中で、つんつんして「笑ったら損だ」みたいなおじさんがいました。もっとニコニコしていてもいいじゃないかって思います。

私は人生のインディアン サマー（小春日和）といいましょうか、冬間近の日々を過ごしておりますけれども、これからも、センス・オブ・ワンダーをもってして生きていきたいと思っています。皆さんもぜひ、そうしてください。この環境の世紀、非常に難しいです。複雑な社会の中で、いろいろな価値観があるけれども、私はやはりセンス・オブ・ワンダーと生命と平和に軸を据え、創造力と想像力を駆使しながら暮していきたいと思っています。

環境の世紀をみんな元気に楽しく、そして確実に、平和といい環境を子どもたちに残すように努力していきたいと思います。希望を持ってそういたしますよ。どうもありがとうございました。